

日本大学松戸歯学部付属病院初診科における紹介患者の動向

内 田 貴 之 須 永 肇 海 老 原 智 康
岩 橋 諒 吉 野 亜 州 香 桃 原 直
梶 本 真 澄 青 木 伸 一 郎 岡 本 康 裕
伊 藤 孝 訓

抄録：大学病院の責務は、歯科臨床の教育機関であるとともに、地域住民に広く高度で質の高い医療を提供していくことである。このため地域の歯科医院にて対応が難しい患者への対応も求められ、大学病院では紹介患者が多く、その訴えも複雑化している。そこで地域医療における病診連携の実態および患者の動向を把握することを目的に、平成28年の12か月間に日本大学松戸歯学部付属病院初診科を受診した患者の中で、紹介状を持参した患者の検討を行った。

紹介患者数は662名（男性236名、女性426名、平均年齢54.6歳）で60歳代が最も多く、50歳代はやや減少していたが、症例数が極端に少ない80歳代以上を除き、概ね年齢が上がるほど患者数は増加していた。紹介理由で多かったのは、紹介元で対処できない疾患に対する治療の依頼で、紹介内容の疾患はう蝕やそれに継発する歯髄疾患などの歯性疾患であり、非歯性疾患は顎関節症が最も多かった。また疾患を年代別に検討すると、30歳代が歯性疾患の割合がもっとも高く、その後、年齢が増加するにつれて、非歯性疾患の割合が増加していた。さらに半数以上が何らかの医科疾患を有していた。

以上より当科には高次医療機関として高いレベルでの患者対応が求められていた。また高齢化に伴い、今後非歯性疾患の患者数は増加することが予想され、高齢患者の多岐にわたるニーズに対応できる病院システムの必要性が示唆された。

キーワード：初診患者 紹介患者 患者動向 大学病院 高齢者

緒 言

日本大学松戸歯学部付属病院（以下、当院と記す）は、昭和46年に千葉県の松戸に開設され、以来40年以上にわたり歯科医師・歯科衛生士の育成とともに、地域の二次医療機関としての責務を果たしてきている。

大学病院では従来通りの高度先進医療病院や研修、教育機関としての機能のみならず、これまで以上に地域と密接に連携することで、地域住民に広く高度で質の高い医療を提供していくことが必要とされている¹⁾。一方、大学病院は紹介患者が多く、紹介患者の平均年齢の高齢化や医科疾患の有病率が増加し、疾患のみならず患者の訴えも社会的背景を反映して複雑化している^{2,3)}。大学病院を受診する患者の動向を知ることが、適切な地域歯科医療を実践する上で重要であり⁴⁾、その基盤となる医療情報として、大学病院における新患者の動向を把握することは地域歯科医療連携強化に必須と考えられている⁵⁾。

そこで当院における病診連携の実態である患者の動向を把握することを目的に、当院初診科に診療情報提供書もしくは紹介状を持参し受診した患者の紹介内容についての検討を行った。

対象および方法

本研究は平成28年1月5日から平成28年12月28日までの12か月間（診療日数293日）に当院初診科を受診した患者の中で、診療情報提供書もしくは紹介状（以下、紹介状と記す）を持参して受診した患者を調査対象として集計を行った。調査項目は年齢、性別、居住地、紹介元施設、紹介理由、紹介理由の疾患、患者が有する医科疾患の7項目とした。男女比についてはカイ2乗検定による統計学的検定を有意水準5%で行った（IBM SPSS Statistics 22）。患者が2つ以上の医科疾患を有していた場合は重複して集計を行った。紹介理由の歯科疾患における年代別の検討においては、症例数が極端に少ない10歳代（19人）と90歳代（3人）は検討から除外した。

なお本研究は日本大学松戸歯学部倫理委員会の承認（承認番号：EC16-11-014-1号）を得て実施した。

結 果

1. 年齢分布

調査期間中に当科を受診したすべての初診患者（以下、初診患者と記す）の数は4,970名（男性1,870名、女性3,100名、平均年齢54.9歳）であった。そのうち

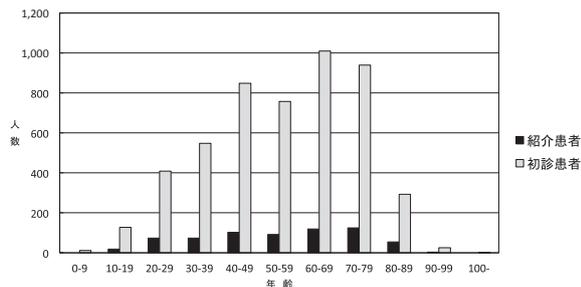


図 1 初診科を受診した患者の年齢分布

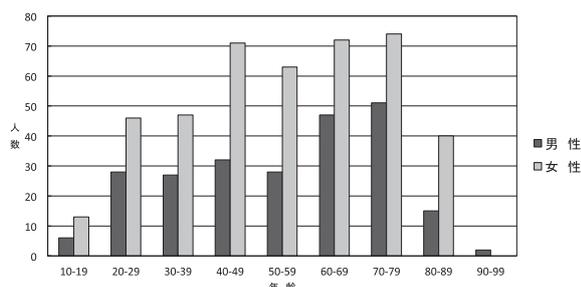


図 2 紹介患者の男女別年齢分布

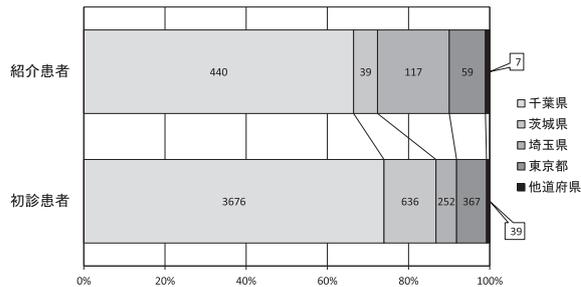


図 3 初診科を受診した患者の居住地

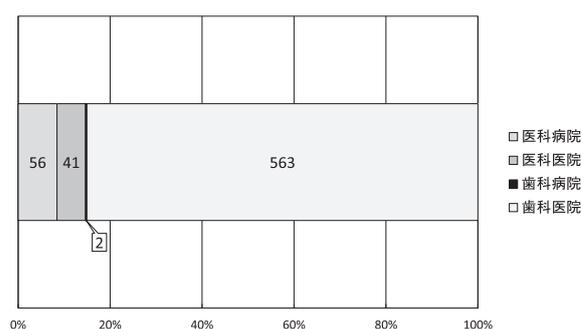


図 4 紹介元施設

紹介状を持参して受診した患者（以下、紹介患者と記す）の数は662名（男性236名、女性426名、平均年齢54.6歳）で、初診患者数に対する比率は13.3%であった。なお紹介患者のうち526名（79.5%）は当院を初めて受診する患者であった。

年齢分布は、初診患者数において60歳代がもっとも多く50歳代はやや減少していたが、概ね年齢が上がるほど患者数は増加し70歳代を過ぎると急激に減少する傾向を認めた。また各年齢別における紹介患者の比率は患者数が極端に少ない10歳未満および100歳以上を除くとすべての年代で10%台であったが、20歳代が18.1%、80歳代が18.4%で他の年代に比べ高い比率を認めた（図1）。

2. 性別

男女比は初診患者、紹介患者ともに女性の比率が高く、初診患者では62.4%、紹介患者では64.4%であり、両者の間に統計学的有意差は認められなかった。また紹介患者の男女別年齢分布（図2）では各年齢層ともに女性が多かったが、男性では60歳代以降に紹介患者数が増加していた。

3. 居住地

患者の居住地は、初診患者、紹介患者いずれにおいても千葉県がもっとも多かった。千葉県に続くのは、初診患者では茨城県、東京都、埼玉県、紹介患者では埼玉県、東京都、茨城県の順であった（図3）。

4. 紹介元施設

紹介元の施設は、そのほとんどが歯科医院であり

85.0%（563名）、ついで医科病院8.5%（56名）、医科医院6.2%（41名）、歯科病院0.3%（2名）の順に多かった（図4）。

5. 紹介理由

紹介状に記載されていた紹介理由でもっとも多かったのは、紹介元では対処できない疾患に対する治療の依頼51.1%（345名）、ついで疾患に対する精査の依頼14.5%（98名）、原因不明の疼痛10.5%（71名）、患者の希望8.4%（57名）、重篤な医科疾患のため6.4%（43名）、歯科恐怖症・嘔吐反射4.0%（27名）の順で、その他の紹介理由は5.0%（34名）認めた（図5）。なお紹介理由が複数ある場合には、複数回答を重複して集計した。

6. 紹介理由の疾患

紹介理由の疾患は、う蝕またはそれに継発する歯髄疾患がもっとも多く17.0%（113名）、次いで根尖性歯周炎14.0%（93名）、慢性歯周炎13.7%（90名）、智歯に関連する疾患9.6%（64名）、その他の歯に起因する疾患9.1%（60名）が認められ、多くは歯に起因する疾患（以下、歯性疾患と記す）であった。なおその他の歯性疾患としては、歯の欠損、骨髄炎、過剰歯、乳歯の晩期残存などがあった。また歯性疾患以外の疾患（以下、非歯性疾患と記す）でもっとも多かったのは顎関節症が9.3%（62名）であった（図6）。

紹介理由の疾患を年代別に検討すると、30歳代が歯性疾患の割合がもっとも高く、その後、年齢が増加

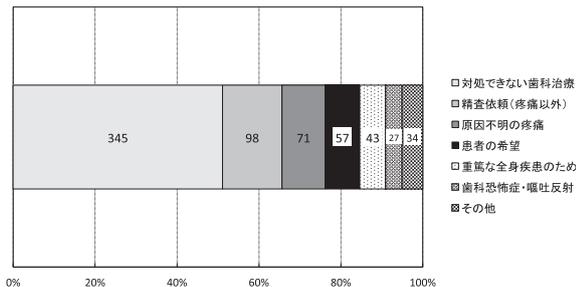


図 5 紹介患者の紹介理由 (複数回答あり)

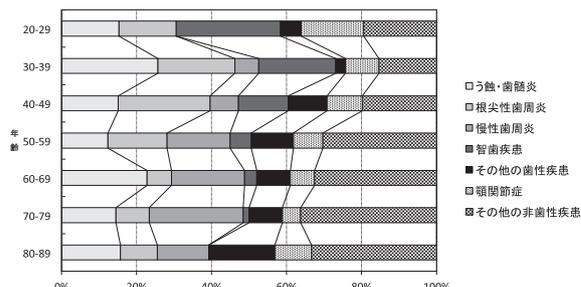


図 7 年代別における紹介患者の疾患

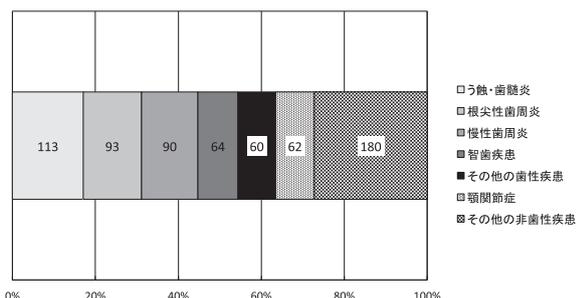


図 6 紹介理由の疾患

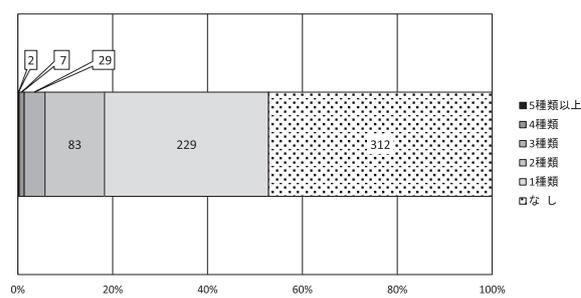


図 8 紹介患者の医科疾患数

するにつれて、非歯性疾患の割合が増加した(図7)。特に舌痛の紹介患者は15名(平均年齢66.5歳)、口腔乾燥8名(平均年齢70.6歳)、またインプラント不適合6名(平均年齢71.0歳)であった。

7. 患者が有する医科疾患

紹介患者のうち、52.9%(350人)が何らかの医科疾患を有し、その内34.6%(121人)は複数の医科疾患を併発していた(図8)。また医科疾患を有する紹介患者350人においてもっとも多い医科疾患は高血圧症で38.6%(135名)、次いで糖尿病14.0%(49名)、心疾患11.1%(39名)、骨粗鬆症10.3%(36名)、精神疾患8.3%(29名)、悪性新生物7.1%(25名)、脳血管障害6.0%(21名)、と続いた(図9)。また医科疾患の有病者の平均年齢は63.2歳、医科疾患を有しない患者の平均年齢は45.0歳であった。

考 察

1. 患者動向について

当院は千葉県北西部の松戸市に立地していることから、千葉県内からもっとも多くの方が受診している。また千葉に次いで隣県の茨城県、さらに都県境が隣接している東京都と埼玉県から患者が受診している。紹介患者の居住地は初診患者と同じように千葉県からがもっとも多かった。これは、当院に隣接する地域における大学病院の歯科が主に口腔外科処置を主体として、一般の保存、補綴治療は積極的に行わない科であるため、当院へは外科処置以外の歯科治療に対す

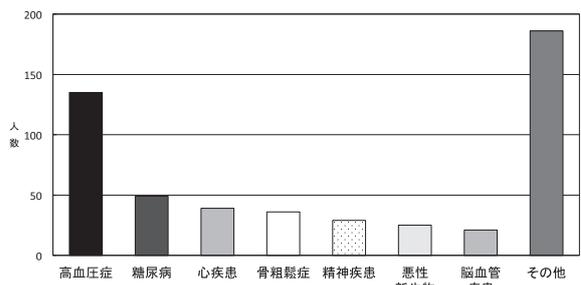


図 9 紹介患者が有する医科疾患 (複数回答あり)

る処置の紹介が多いと考えられる。また東京都内には多数の歯科大学病院が存在するのに対して、当院が隣接する埼玉県東部では他の大学病院が遠方であることから、埼玉県から当院への紹介が多くなったと考えられる。一方、茨城県は隣県であるが県境から当院までの距離が長いことから、茨城県からの紹介患者数は比較的少なかったと考えられる。

初診患者数に対する紹介患者の比率に関しては、当院に隣接する地域における大学病院の紹介率に関する報告に比べて紹介率は低かった¹⁾。これは当院では専門診療科宛の紹介状(口腔外科宛など)を持参して受診した場合、初診科を経由せず直接専門診療科を受診していることから、病院全体の紹介率は今回調査を行った当科だけの紹介率より高く、地域医療との連携が強くなされていると考えられる。なお当院では基本的に15歳以下の患者についても、初診科を経由せ

ずに小児歯科にて直接対応している。

患者の年齢分布は初診患者、紹介患者ともに50歳代の患者数でやや減少するが、70歳代まで徐々に増加する傾向であった。日本の人口推計の人口ピラミッドは釣鐘型の形態で⁶⁾、特に60歳代、40歳代にピークを認め50歳代がやや減少している2峰性であり、今回の調査における初診患者、紹介患者いずれの年齢分布もこの統計結果に相似している。受診患者の年齢分布について西野ら⁷⁾は、所在地の地域性が大きく関与しているとしているが、当院に隣接する地域における大学病院の初診患者の臨床統計を報告した木村ら¹⁾も、本研究と同様の年齢分布を報告していることから、当院が立地する千葉県北西部における地域性として、紹介患者の年齢分布は概ね日本の人口の年齢分布に沿った動向を示していると考えられる。また20歳代と80歳代の紹介患者の割合が他の年代と比較して高かった。これは20歳代では大学病院の診療時間が一般的な勤務時間と重複しているため⁷⁾、80歳代では体力的な理由で、いずれも大学病院を受診しにくい状況が考えられる。しかし専門的治療が必要と判断されて紹介される患者は一定の数が存在するため、初診患者数が少ない20歳代、80歳代の紹介患者数の割合は増えたと考えられる。

性別は1:2の比率で女性が多かった。他の大学病院における受診患者の報告では、男女比は本研究と同様の値を報告している⁷⁾。その理由として、前述の大学病院の診療時間と勤務時間の関係から、特に男性は就業のため大学病院への受診が困難になりやすいことが考えられる。本研究においては男性患者の紹介患者数が、定年退職を迎えると考えられる60歳代以降に増加していた。藤木⁸⁾は歯科診療所における初診患者の男女比は各診療所によりまちまちであり、一定の傾向は認めなかったと報告している。このことから、大学病院における1:2の男女比は、前述の理由により女性の方は時間的制約が比較的少ないことから受診しやすい結果ではないかと考えられる。

紹介理由でもっとも多かったのは、紹介元で対処ができない、もしくは精査の依頼などの紹介元での対応が困難な患者であった。特に今回の調査した紹介元施設のほとんどが歯科診療所であることから、処置、検査に関して一般の歯科診療所では設備的にも困難な症例への対応が求められていることがわかる。特に歯科恐怖症もしくは嘔吐反射が強いため治療困難な場合、当院にて静脈内鎮静下で処置を行うことになり一般の歯科診療所での対応は困難なことが多い。一方、医科疾患を有する患者に対して、抜歯処置、抜歯処置の依頼など局所麻酔を伴う処置のみの依頼も認められ、リスク回避の観点から大学病院の全身管理下での処置を考えての依頼と考えられる。さらに単純に抜

髓、根管治療の依頼など、特に歯内療法処置に対して細矢ら⁹⁾の報告と同様に、専門技術による処置とともに時間を要する治療も依頼されることがあると考えられる。また紹介元施設の中の医科病院、医科医院からの紹介は、医科疾患の治療で医科へ通院中に歯科疾患を併発した場合、医科では歯科疾患治療への対応が困難であるため歯科への紹介が必須となる。しかし重篤な医科疾患を有する場合は、一般歯科診療所での対応が困難と紹介元で判断し、当院での治療が必要と紹介されたものが多いと考えられ、医科からも地域の高次医療機関としての対応が求められていることを示すものと考えられる。

2. 紹介患者の疾患について

紹介内容の歯科疾患については、歯性疾患に対する治療の依頼が全体の63.4%であり、比率はう蝕またはそれに继发する歯髄炎、根尖性歯周炎、慢性歯周炎、智歯に继发する疾患の順に多かった。歯髄炎に関しては、原因不明、神経因性疼痛、特発性顔面痛の診断にて紹介されたが、実際の診断は歯髄炎の関連痛に伴う歯痛錯誤であるような症例も散見された。根尖性歯周炎に関しては、一部保険導入されたマイクロスコープによる根管治療の依頼、全顎的な重度慢性歯周炎の治療の依頼、埋伏智歯の抜歯など、より専門性の高い治療を当院に求めて紹介されている。なお智歯に関しての抜歯の依頼などは、当科を経由せず抜歯処置を行う口腔外科に直接紹介されたため、当科へ紹介された患者以上に当院への紹介患者が受診していると考えられる。

年代別の内訳では、う蝕、歯髄炎は年代ごとの傾向は認めないが、根尖性歯周炎は年代が上がるごとに減少傾向にあり、慢性歯周炎は年代が上がるごとに増加傾向を認めた。これは各年齢層における現在歯数が近年増加し、2大疾患のうち、う蝕については早期治療が施され、残す慢性歯周炎の治療対象となる歯が多くなっている傾向が考えられる。さらに智歯に继发する疾患については、年代が上がるごとに減少する傾向が顕著であり、高齢になる前に智歯の抜歯がすでに行われている傾向が高いことを示すものと考えられ、各年齢層における各疾患の罹患率が反映された結果を認めた。

非歯性疾患の診断、治療についても専門性が求められることから、歯科診療所で診断、治療が困難なため紹介されることが多いと考えられ、その中でもっとも多かったのは顎関節症であった。年代別の比率を検討すると、10歳代は症例数が少ないため一概に比較することは困難であるが、若年者ほど比率が高く30歳代以降徐々に比率が低くなる傾向を示し、他の機関での顎関節症患者の受診状況で報告されている若年者にピークが存在する傾向と同様な傾向を示した¹⁰⁾。顎関節症患者の大学病院への紹介に関して小嶋ら³⁾は、顎

関節症の診断・治療に関する情報が歯科の中で広まったこと、また診療ガイドラインが作成されたことなど、一般歯科医院と高次医療機関との治療の分担が普及し紹介患者が減少しているとしている。しかし前述の抜歯処置の口腔外科と同様に、当院では顎関節症患者が顎関節咬合科に直接紹介がなされていることも併せて考えると、いまだ専門性の高い治療との認識が高く当院へ紹介は多いと考えられる。また疾患の年代別の内容は30歳代が菌性疾患の割合がもっとも高く、その後、年齢が増加するにつれて顎関節症以外の非菌性疾患の割合が増加した。これらの疾患の中では舌痛症、口腔乾燥症、また高齢者におけるインプラント不適合に対する処置などが集中して認められた。久保田ら¹¹⁾は近年、高齢者歯科医療の重要性が注目され、特に舌痛や口腔乾燥などを訴えて来院する患者が増加し、その平均年齢は64.1歳でその内の61%が65歳以上だったと報告している。超高齢社会に向けて患者数が増加傾向にある高齢者歯科領域において、これらの疾患が口腔疾患の中でも重要な疾患となっていると示唆し本研究結果からもその傾向が認められた。またインプラントの不適合については、インプラント体の除去もしくは上部構造体の破損への対応が依頼され、今後、高齢者の埋入後長期経過したインプラントへの対応も増してくると考えられた。

以上のことから、当科に来院している紹介患者は高齢者が多く有病者の比率は必然的に高くなっていった。このため半数以上の患者が何らかの医科疾患を有し、さらに2つ以上の医科疾患を有する患者も多く認めたことから、歯科診療所では対応が困難な患者に対して当院に高次医療機関として高いレベルでの患者対応が求められていることが確認された。また高齢の患者では医科疾患に対する有病率が高いとともに、非菌性疾患の紹介の割合が高いことが認められた。このことは当院では二次医療機関として専門性に基づく対応が求められている中で、高齢化に伴い非菌性疾患の患者数は増加することが予想されるため、高齢患者の多岐にわたるニーズに対応できる病院システムの必要性が示唆された。

結 語

日本大学松戸歯学部付属病院初診科における平成28年1月5日から平成28年12月28日までの12か月間の紹介患者の検討を行い、以下の結論を得た。

紹介患者数は662名(男性236名, 女性426名, 平均年齢54.6歳)で、初診患者数4,970名に対する比率は13.3%であった。平均年齢は54.6歳で70歳代がもっとも多く50歳代がやや減少するものの、概ね年齢が上がるほど患者数は増加しピークの70歳代を過ぎると急激に減少していた。紹介理由は紹介元では対

処できない疾患に対する治療の依頼が半数以上であり紹介内容の疾患は菌性疾患が多かったが、疾患を年代別に検討すると年齢が増加するにつれて非菌性疾患の割合が増加していた。

今後の超高齢社会に向けて、当院に対しては重篤な医科疾患を有する患者への対応など、高次医療機関として高いレベルでの患者対応が求められていることが確認されたとともに、菌性疾患だけではなく多岐にわたる疾患への対応の必要性が示唆された。

謝 辞

稿を終えるにあたり、研究に多大なご協力をいただきました日本大学松戸歯学部歯科総合診療学講座医局員の先生方に厚く御礼申し上げます。

本論文に利益相反に関する内容は含まれていない。

文 献

- 1) 木村祐一郎, 武田 瞬, 酒井克彦, 吉田恭子, 浮地賢一郎, 他. 東京歯科大学市川総合病院歯科・口腔外科における平成23年度外来初診患者の臨床統計. 歯科学報 2013; 113: 64-68.
- 2) 小嶋郁穂, 飯久保正弘, 金田直人, 阪本真弥, 佐々城誠, 他. 歯科受診患者の主訴に関する診断学的研究—過去30年間の主訴と変遷と社会的背景について—. 日口診誌 2011; 24: 320-325.
- 3) 酒井 梓, 飯久保正弘, 嶋田雄介, 橋本直也, 熊坂晃, 他. 東北大学病院歯科部門における外来患者動向—臨床研修ならびに臨床教育に対する意識調査—. 日口診誌 2014; 27: 7-12.
- 4) 松田 哲, 儀保逸也, 大竹千尋, 荒木久生, 明海大学PDI東京歯科診療所における新来患者臨床統計的観察—2005年と2013年の比較—. 日口診誌 2015; 28: 107-112.
- 5) 鷲尾絢子, 中川愛加, 廉 晃勲, 西藤法子, 中居慎二, 他. 九州歯科大学附属病院保存治療科を受診した初診患者の調査—2003年度～2010年度—. 九州歯会誌 2012; 65: 198-204.
- 6) 厚生労働省政策統括官(統計・情報政策担当). 平成29年 我が国の人口動態—平成27年度までの動向—. 厚生労働省政策統括官(統計・情報政策担当)編. 人口Population. 第1版. 東京: 厚生労働省政策統括官(統計・情報政策担当); 2017. 6-7.
- 7) 西野宇信, 曾我部浩一, 永松 浩, 鬼塚千絵, 佐伯桂, 他. 九州歯科大学附属病院第1総合診療科における患者の動向—平成15年度～平成19年度—. 九州歯会誌 2009; 63: 109-114.
- 8) 藤本省三. 歯科診療所における初診患者の実態調査とその推移 第7報. 日本ヘルスケア歯科学会誌 2014; 15: 79-91.
- 9) 細谷哲康, 木村素子, 石尾登子, 白川 哲, 新井 高, 他. 鶴見大学歯学部附属病院初診室における紹介患者の実態調査—特に歯内療法領域への紹介について—. 鶴見歯学 2011; 37: 1-7.
- 10) 日本顎関節学会 編集. 顎関節症. 第1版. 京都: 永末書店; 2013. 1-24.
- 11) 久保田有香, 遠藤真美, 久保田潤平, 上森尚子, 唐木純

一, 他. 歯学部附属病院高齢者歯科における患者動態の
検討. 九州歯会誌 2012 ; 66 : 21-28.

著者への連絡先

内田 貴之
〒 271-8587 千葉県松戸市栄町西 2-870-1
日本大学 松戸歯学部 歯科総合診療学講座
TEL 047-360-9423 FAX 047-360-9426
E-mail : uchida.takashi@nihon-u.ac.jp

Survey of patients referred to the initial treatment clinic at Nihon University School of Dentistry at Matsudo Hospital

Takashi Uchida, Hajime Sunaga, Tomoyasu Ebihara,
Ryo Iwahashi, Asuka Yoshino, Suguru Momohara,
Masumi Kajimoto, Shinichirou Aoki, Yasuhiro Okamoto
and Takanori Ito

Department of Oral Diagnostics, Nihon University School of Dentistry at Matsudo

Abstract : In addition to their traditional role as institutions offering highly advanced medical treatments, training, and education, university hospitals provide advanced, high-quality medical care to a wide range of local residents. They also serve numerous referred patients. In recent years, the patient's complaint has grown increasingly complex. Accordingly, we reviewed patients who brought referral letters for their examinations, among patients who had undergone examinations at the Initial Treatment Clinic at the Nihon University School of Dentistry at Matsudo hospital during the twelve months of 2016. The objective of this review was to ascertain the actual status of collaboration between local clinics and the hospital and patient trends in community medicine.

During this period, 662 patients were referred to the Clinic (236 males, 426 females, average age: 54.6 years). The largest number was in the age range of 60-69 years; relatively fewer patients were in the 50-59 age group. The numbers of patients generally rose with age. The most common reason for a referral was to request treatment for diseases the referring institution could not treat. Many referrals were for tooth disease, including dental caries or dental pulp diseases secondary to dental caries. Among non-tooth-disease referrals, many cases involved temporomandibular disorder. A look at disease by age range shows that patients in their 30s had the highest rates of tooth disease, while rates of non-tooth diseases increased with age. More than one-half of the patients had some clinically diagnosable condition.

From the above findings, the Clinic is expected to provide a high level of patient services as a secondary medical care facility. In addition, the numbers of non-tooth-disease patients are projected to increase as society ages, suggesting the need for a hospital system capable of meeting the diverse needs of elderly patients.

Key words : new patients, referred patients, patient trends, university hospitals, seniors